

つぶ太とおじいちゃんの

不思議な冒険

ふしぎなぼうけん

- 夜空の図書館 -

よぞらのとしょかん

つぶ太とおじいちゃんの

不思議な冒険

ふしぎなぼうけん

- 夜空の図書館 -

よぞらのとしょかん

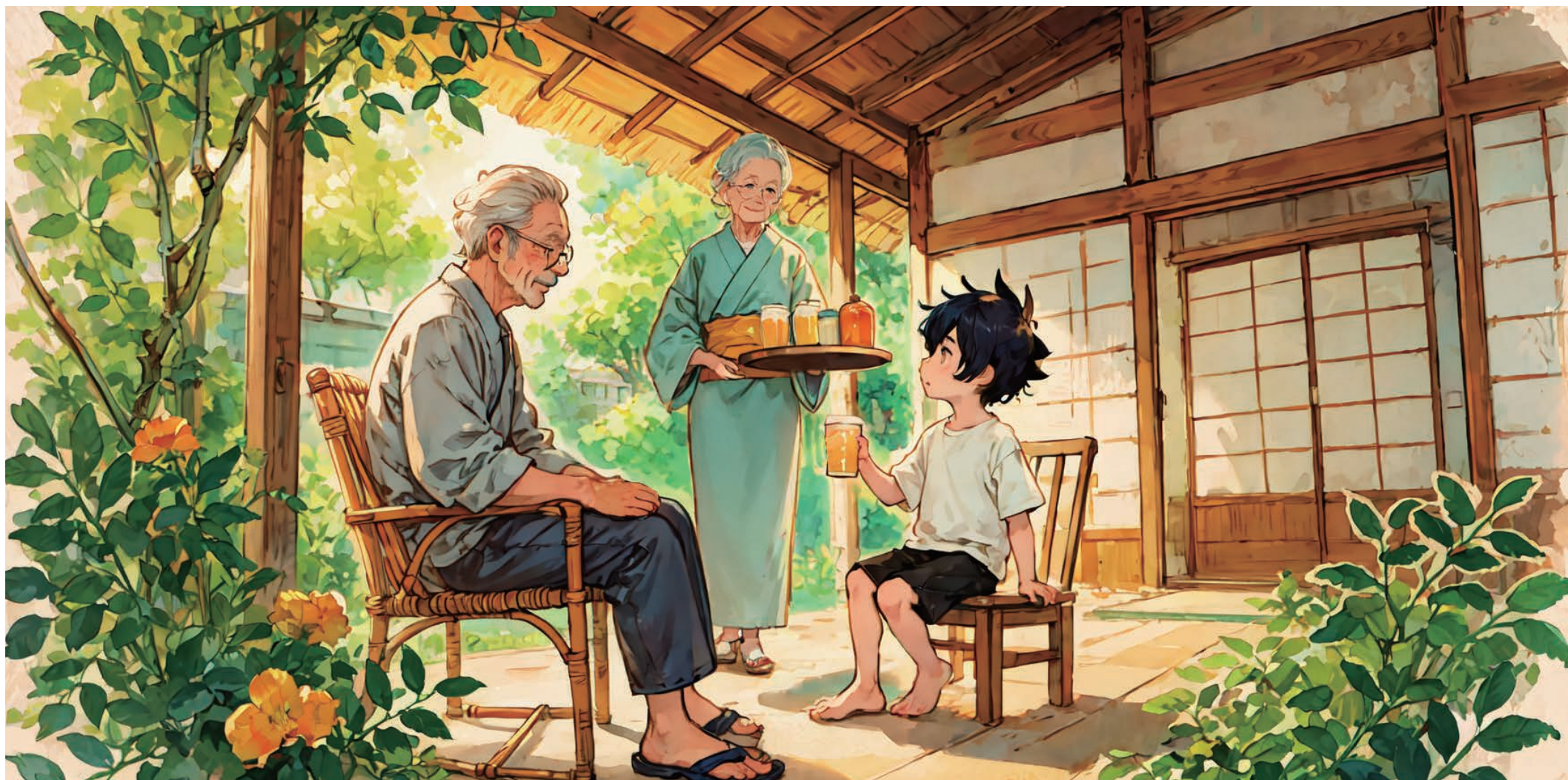


作：葉月

絵：Stable Diffusion / Dall-E 3



うつくしい森ときれいな川が流れる小さな村のはしに、ぽつんと家があります。
おだやかなしぜんの中、その家にはおじいさんとおばあさんがくらししていました。



ある夏の日、つぶ太はおじいちゃんとおばあちゃんの家にあそびに来ていました。
つぶ太はおじいちゃんとおばあちゃんが大好き。
とくにおじいちゃんが話してくれるふしぎなお話大好きです。



ある夜、つぶ太はおじいちゃんといっしょに星空（ほしぞら）をみていました。
「つぶ太、お月さまをみてごらん」とおじいちゃんがやさしくいいました。
つぶ太はお月さまをみあげると、おじいちゃんがしずかにはなしはじめました。



「あそこには、『夜空の図書館』という
ふしぎな場所があるんだ」

つぶ太は、おじいちゃんの話にむちゅ
うになりました。

「とくべつな月の夜にだけひらかれる
ひみつのとびらをとおると、その図書
館に行けるんだ」

つぶ太はワクワクしながら、ひみつ
のとびらがどこにあるのかをたずねま
した。



おじいちゃんはしずかに立ち上がり、つぶ太をひみつのとびらがある なや へとつれて行きました。

「このとびらをあけると、星がかがやく夜空の図書館が広がっているんだ」
つぶ太はドキドキしながらとびらをあけました。



すると、そこには星がキラキラとかがやくうつくしい図書館が広がっていました。

「おじいちゃん、ここはすごいね！」

すると、図書館のおくからうさぎのような耳のひとがあるいてきました。



「ようこそ、夜空の図書館へ。わたしは、ここで"ししょ"をしているもち子とい
います。」もち子はにっこりとわらいながら言いました。

「ここには、ふしぎな本がたくさんあります。きょうはどんな物語（ものがたり）
をおさがしですか？」

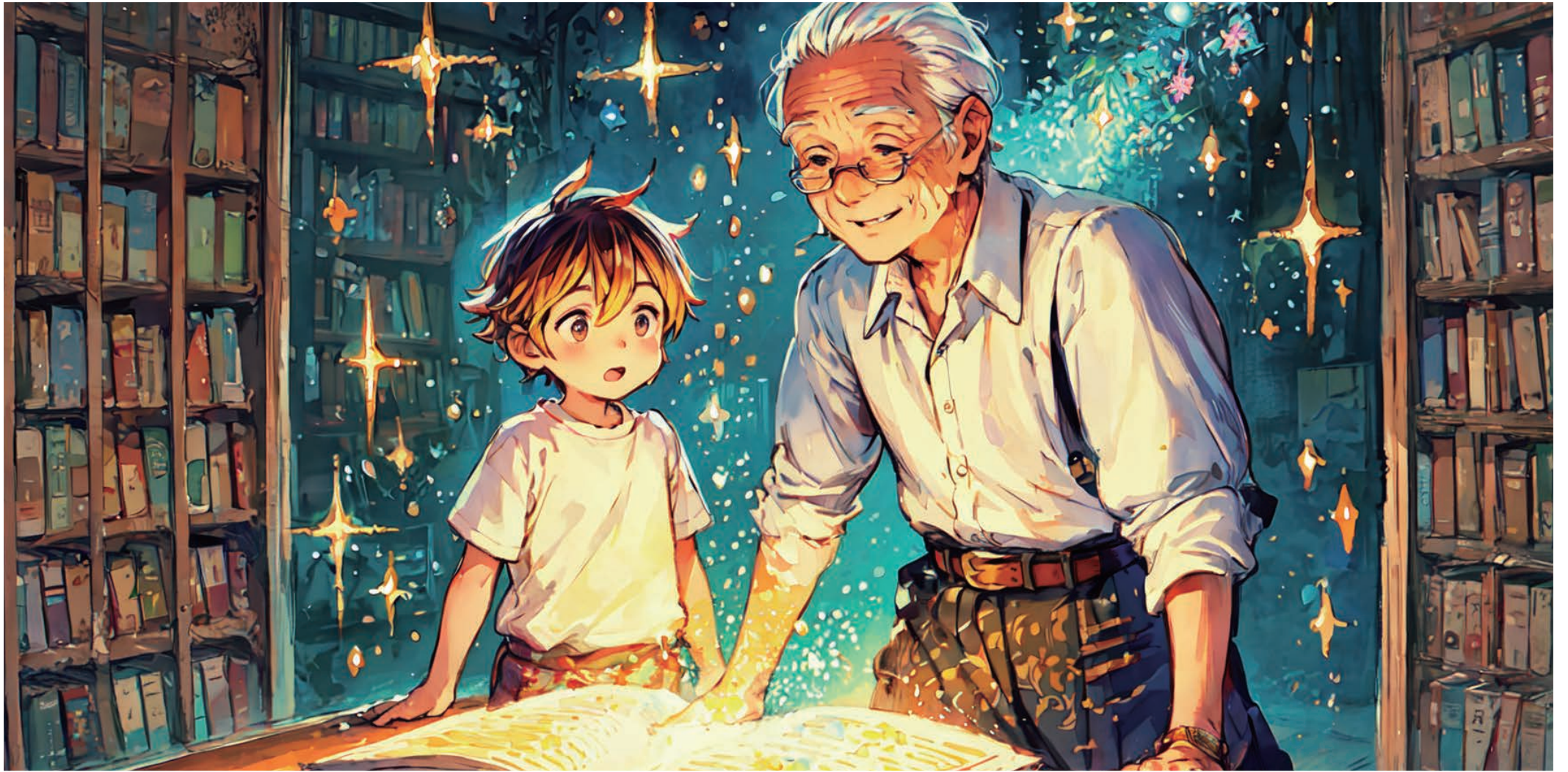


つぶ太はおじいちゃんのむかし話をおもいだしながらこたえました。

「おじいちゃんがわかいときにしたぼうけんの物語をよみたいです！」

もち子はほほえみながら、本だなの1さつをとりだしました。

「それでは、こちらの本をどうぞ。おじいちゃんがわかいころにした、すばらしいぼうけんの物語です。」



つぶ太とおじいちゃんがその本をひらくと、二人は本の中のせかいにひきこまれて
いきました。



二人は、川のほとりに立っていました。

川の水はにごり、ながれがよわくなっています。

「おじいちゃん、ここはどこ？」 つぶ太は、ふしぎそうにたずねました。

「ここは、わしがわかいころにきたことのある川だよ。」



つぶ太が川のようにすを見ていると、とつぜん、川の方からカッパがあらわれ、ふたりにむかってちかよってきました。つぶ太はカッパを見るのがはじめてなので、とてもおどろきました。



おじいちゃんは、おやつとにもって
きていたキュウリをカッパにあげ
ると、カッパはキュウリをそのばで
たべはじめました。

「ちょうどはらがへっていたところ
だったんだ。しんせんで、いいキュ
ウリだ。」

「わたしはカッパのミツハ。この川
の水がよごれて、水がすくなくなっ
てしまったのでしらべていたところ
だ。」



「どうだ？ いっしょにくるか？」

ミツハがいうと、つぶ太はうなずきました。

おじいちゃんをつぶ太はミツハといっしょに川をしらべることになりました。



川のほとりをおるいと、
とつぜん、魚のせいいが現れまし
た。

ミツハは せいい たちととてもな
かよしです。

「ミツハ、ミツハ。わたしはこの川
にすむ魚のせいいです。さいきん、
水がよごれてしまって、とてもこ
まっているのです。」



つぶ太は魚のせいれいにたずねました。

「どうして水がよごれてしまったの？」

魚のせいれいはかなしそうにこたえました。

「人間たちが川にゴミをすてるせいで、水がよごれてしまったのです。水がきれいでないと、私たち魚は生きていけません。」

「わかった。げんいんをしらべてかいけつするよ。」

ミツハがそう言うと魚のせいれいは川にもどっていきました。



そして、3人が川の上の方にむかってあるいていると、こんどは、空から鳥のせいれいがおりてきました。

「ミツハ、ミツハ。私もこまっています。水がよごれてしまうと、わたしたち鳥ものみ水がなくなってしまうのです。」



「わかった。げんいんをしらべて かいけつするよ。」

ミツハがそういと鳥のせいは大空にもどっていきました。



さらに、3人が川のうえのほうにむかってあるいていると、川のふちの木々から木のせいれいたちがあらわれました。

「ミツハ、ミツハ。わたしたちにも水がひつようです。水が少なくなってこまっているのです。水がないと木々もかれてしまい、この森がダメになってしまいます。」



「わかった。げんいんをしらべて かいけつするよ。」

ミツハがそういうと木のせいれいたちは森にもどっていきました。



つぶ太はおどろいて言いました。
「水がこんなにたいせつだなんてし
らなかったよ。どうしたら水をまも
れるの？」

ミツハはこたえました。
「まずはゴミをすてないことだ。そし
て、水をよごさないように、みんな
できょうりょくすることがたいせつ
なんだ。」

おじいちゃんがいいました。
「水は人間だけのものではない。この
せかいに生きているみんなのものな
んだ。」



風のせいれいがどこからともなくあらわれ、ささやくようにいいました。
「みんなでちからをあわせて、水をまもりましょう。」



つぶ太はせいれいたちの話をきいて、水をまもる たいせつさをまなびました。
そして、ミツハと いっしょに川のもんだいをかいけつするためにさらに川のうえ
のほうへむかいました。



さらにすすむと、川がゴミでせきとめられている ばしょ にたどりつきました。
カワウソたちが、たくさんのゴミをつみあげています。

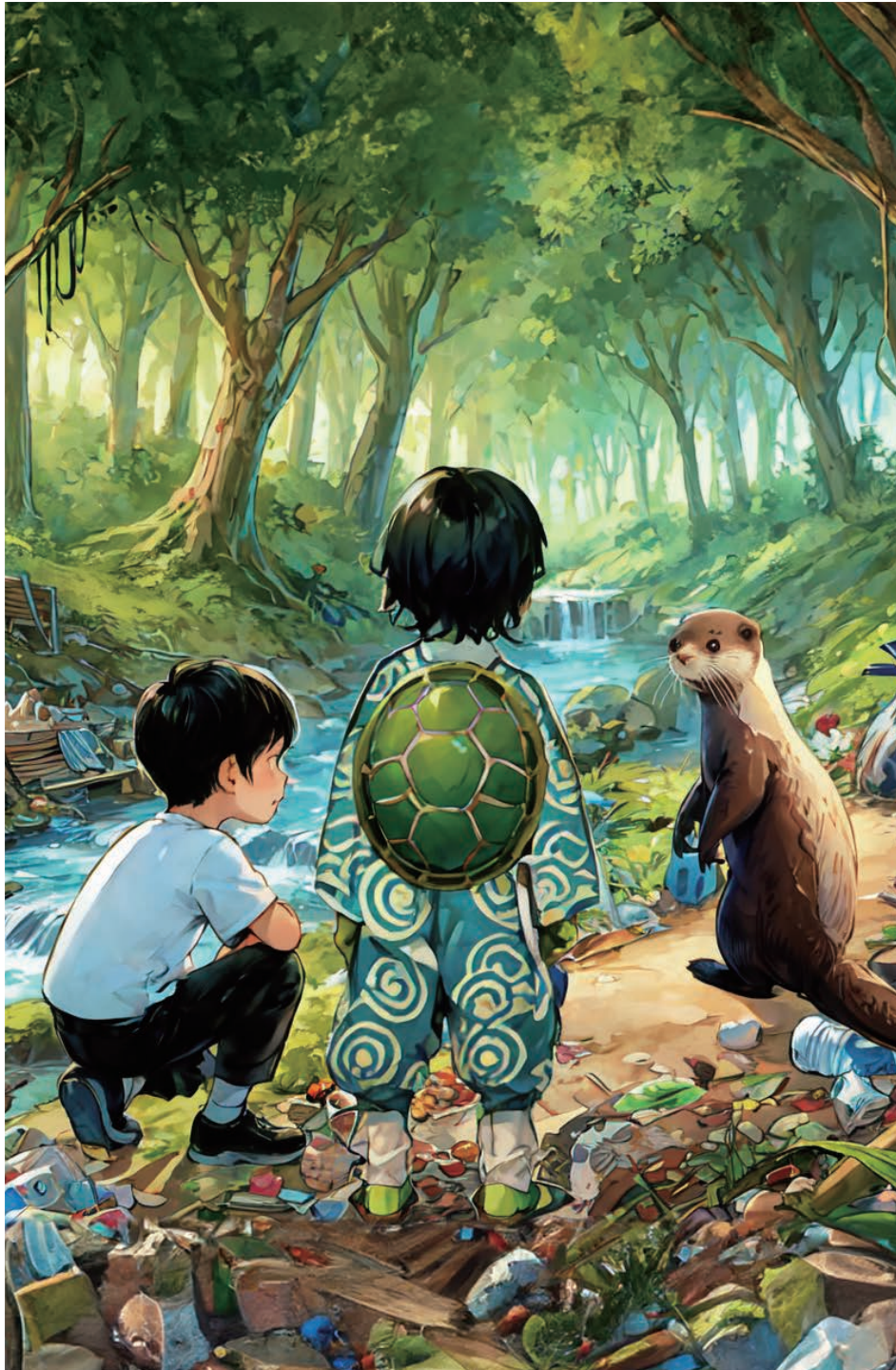


つぶ太はカワウソにはなしかけました。

「こんにちは、カワウソさん。どうしてこんなことをしているの？」

カワウソはするどい目をしてこたえました。

「人間たちが川にゴミをすてるせいで、水がよごれてしまったんだ。わたしたちのすむばしょがどんどんわるくなっている。だから、ゴミをつかって川をせきとめて、人間たちにいかりをつたえようとしているんだ。」



つぶ太はかなしそうに言いました。
「ごめんね、カワウソさん。ぼくたちは知らなかったんだ。」

ミツハもうなずきながらいいました。「ゴミをすてることがどれだけかんきょうにわるいかを知らない人もおおい。でも、こうやって川をせきとめることはもっとわるいことになるかもしれない。」

カワウソはためいきをついていいました。「でも、どうしたら人間たちにこのくるしみをつたえられるのかわからないんだ。」



おじいちゃんはやさしくほほえんでいました。

「カワウソさん、人間たちに森や水のたいせつさをおしえよう。」

つぶ太もげんきよくいました。

「そうだよ、みんなで川をきれいするほうほうをかんがえよう！」



森のいきものやせいれいたちもあつまってきました。そして、みんなでゴミをかたずけるほうほうをかんがえました。

「いいかんがえがある。」つぶ太がいました。

人間たちにゴミそうじをさせるというのです。

「このゴミのことを人間にしてもらわないといけないとおもう。」

つぶ太がいました。

みんなでつぶ太の話を書きました。

つぶ太のかんがえを書きにした森のいきものやせいれいたちはさっそくじゅんぴにかかりました。

そして、たくさんのチラシを作り、町のじゅうみに森でイベントがおこなわれることを知らせました。

「きっと、うまくいく」

つぶ太はこのなかでねがいました。

ー おしらせ ー

こんや、森をながれる川のほとりでイベントをかいさいします。

イベントでは、げんそうてきなショーがおこなわれ、森でとれた山菜(さんさい)やキノコのりょうりがふるまわれます。

さんかりょうは無料(むりょう)です。

ただし、家にあるいちばん大きな袋(ふくろ)をもってきてください。

森のゆかいななれまたちより



その日のゆうがた、たくさんの町の人々が大きな袋（ふくろ）をもってあつまってきました。

町の人々はゴミの山をみておどろきました。

「これはいったい何だ？」とみんながこえをあげました。



そのとき、せいれいたちのこえがどこからともなくきこえました。
「これは、人間がすてたゴミです。森や川の水がよごれて、たくさんのいきもの
がこまっています。」



じぶんたちのおろかさに気がついた人間たちは、もってきていたふくろにゴミをいれはじめました。ゴミそうじがはじまったのです。カワウソたちもてつだいました。つぶ太とおじいちゃんもいっしょうけんめい ゴミひろいをしました。



あっというまにゴミはかたずき、森がきれいになると、川の水はもとのながれをとりもどしました。

森のいきものもせいいいも人間たちもよろこびました。

もちろんつぶ太とおじいちゃんも。



もうすっかりあたりがぐらくなくなっていました。

するととつぜん、空があかるくなり、森のせいれいたちが光りながら空をまいはじめました。



鳥たちが空をとびまわり、キノコやコケがひかっています。それはなんともいえないげんそうてきなせかいでした。

「こんなすばらしいものはみたことがない!」「まるでゆめの中にいるみたい!」
みんな、おどろき、よぞらのショーをたのしんでいます。



そして、森でとれた山菜（さんさい）やキノコのごちそうもふるまわれました。
「こんなおいしいなんてしらなかった!」「森のごちそうね!」
みんな、おいしいりょうりにとてもよろこびました。



ショーがおわると、人間たちは大きなはくしゅをおくりました。
そして、ゴミいっぱいの袋をもって町へとかえっていきました。星の光やキノコ、
コケがかえりみちをてらしています。
森のいきものたちは、とてもよろこびました。



「さくせんせいこうだな。」 ミツハはつぶ太にほほえみました。

あたりをやさしい風がつつむと、つぶ太とおじいちゃんは、夜空の図書館にもどっていました。



つぶ太はもち子にぼうけんのほうこくをしました。

「とてもたいせつなことをまなんだようですね。」もち子はつぶ太を見てまんぞくげにうなずき、二人をあたたかくむかえました。



とびらをとおって家にもどると、おばあちゃんがにこやかにまっていた。テーブルの上にはキュウリのつけものとつめたいむぎちゃがありました。



「あのあと どうなったの？」 つぶ太はおじいちゃんにたずねました。

「あの人々のすむ町は、あれから水の町とよばれるようになったんだ。みんなが森や川をたいせつにしたからだな。」

つぶ太はできごとをおばあちゃんにはなしながら、3人はたのしい夜をすごしました。



水があたりまえのようにまわりにあるから、そのたいせつさに気づいていないのです。
水はこのせかいで、とてもたいせつなもの。



水がないとキュウリもそだたないし、
むぎちゃものめません。

人も動物（どうぶつ）も植物（しょくぶつ）も水がないといきていけないのです。

森や水をまもるためにはどうすればいい？



考えることが大切です。

さあ、考えてみましょう。

きつとなにかできる。

つぶ太とおじいちゃんの不思議な冒険

夜空の図書館



著者 : 葉月

絵 : Stable Diffusion / Dall-E 3

出版元 : PASIKURU

初版発行 2024 年 8 月 13 日